（C）日刊スポーツ新聞社

2014.7.23→2020.7.24

大みそか「今何年だ？」「あすから17年です」指折り「18、19、20…もつな！」2度目の五輪へ!!

まだ戦いは終わらない

NIKKAN SPORTS
東京オリンピック特集

現在はパーキンソン病と

板木の病院で懸命にリハビリに励むマサ斎藤

プロレスラーとしてリングで

87年10月厳流島決戦でアントニオ猪木を締め上げる

マサ斎藤は戦ってきた

64年東京五輪はマットで

日米プロレス界のレジェンドで、1964年東京五輪レスリングヘビー級代表のマサ斎藤（74）が、2020年東京五輪を励みに懸命の闘病を続けている。引退した99年に、パーキンソン病を発症。リハビリを休めば体の自由はますます奪われる。だが、（3O LOR BROKE（当たって砕ける）の信条は失っていない。戦い続けてきた男の激動の半生、根底にある五輪への思いに迫った。【取材・構成＝奥山将志】

300回超 大連載 第129回

64年、東京五輪にレスリングヘビー級代表として出場した明大の斎藤昌典（本人提供）

体重120→70キロ

栃木県内のリハビリ病院にいる斎藤を訪れたのは、昨年4月のある午後1時だった。現役時代、はち切れんばかりに鍛え上げられた体は小さくなり、体重は120キロから70キロまで落ちた。74歳、白髪交じりの頭に、背中もかし丸まっていた。だが、あいさつした記者を車いすから見上げた目は、戦いの中にいる男のそれだった。

病は急に襲ってきた。99年、56歳でリングに別れを告げたころ、少しずつ体に異変が起きていた。ろれつが回りにくくなり、顔が細かく左右に震え始めた。1年以上も国内外の病院を転々とした結果、パーキンソン病だと分かった。原因は現役時代に蓄積された脳へのダメージ、暴飲暴食、リングに上がり続けるために飲んでいた強い鎮痛剤も関連していると言われた。ゴールのない、壮絶な戦いが始まった。

過酷リハビリ

16年がたった現在、進行は未期に入っている。1日に数回襲ってくる発作が始まれば、全身の震えが治まるまでじっと待つしかない。1回1時間の リハビリを1日に3回。365日、少しでも怠れば体の自由はさらに奪われる。何度も絶望し、何度も自殺を考えた。だが、逃げることは許されない。

90年2月AWA世界

転向の第1号

戦い続けてきた、明大4年時の1964年に東京五輪に出場、コーチからは4年後のメキシコ五輪を目指せ、と言われる日本プロレスに入団した。五輪出場選手のプロレス転向第1号だった。翌66年に東京プロレスの旗揚げに参加するも、すぐに経営難に陥り、米国に武者修行の場を求めた。後ろ盾なし一人で海を渡った。

日系人が日本人を演じ、ヒールとして活躍していた時代、後に、「元オリンピアン」という肩書きが大きな武器であった。俺は東京五輪のレスリング日代表だ、一番強い人だ。現地のプロモーターに自らを売り込んだ。スター選手だったエジプシ渋谷のタッグパートナーに抜てきされると、サンフランシスコ、ロサンゼルスを中心に大ブレーク。

伝説「厳流島」

その後もNWA、WWF（現WWE）、AWAと3大メジャー団体を転戦し、全米にその名をとどろかせた。日本でも猪木との「厳流島の戦い」など数々の伝説を残し、98年に引退。だが、斎藤の用心棒な体に病が潜んでいた。

熊と戦った男 米で収監も

生ひろし伝説 マサ斎藤（さいとう）

明大出身　本名は斎藤昌典。1942年（昭17）8月7日、東京都北区生まれ。

◆レジェンド　65年6月、日本プロレスでデビュー。67年に渡米し、長期にわたり米国で成功を収めた。獲得タイトルはWWFタッグ王座、AWA世界ヘビー級王座など多数。得意技は自身で考案したひねりを入れたジャーマンスープレックス、監獄固め。

◆厳流島の戦い　87年10月、山口の「厳流島」で行われたアントニオ猪木との時間無制限ノーレフェリー、ノールール、無観客マッチ。2時間5分14秒の死闘の末、立会人裁定で敗れた。

◆発掘＆指導　ビッグバン・ベイダー、スコット・ノートン、ドン・フライらを見いだす。05年に佐々木健介、北斗晶が立ち上げた団体では、全日本3冠ヘビー級王者宮原健斗、ノアのマサ北宮らを育てた。

◆逸話　熊と戦ったことがある。ホーガンとの抗争で人気が爆発し、米国で「ミスター　サイトー」というカクテルができた。84年に同僚レスラーの警察官とのけんかに巻き込まれ、1年半、米国で収監された。ジダース以上ビールを飲み、特大サイズのピザを2枚食べるのが日課だった。

ヘビー級フリー 1分け1敗失格

◆マサ斎藤の見逃せ話題　最終選考会を兼ねた64年8月の全日本選手権はヘビー級でフリーとグレコの両スタイル制覇。五輪はフリーで出場し、グレコは2位の杉山恒治（サンダー杉山）が出場した。初戦の2回戦でロバート・ソン（スウェーデン）と引き分け、3回戦で マクナマン（英国）にフォール負けして失格した。

好感度高める5原則

TALKTOPIA 講座② おもてなし講座 講師 江上いすみ先生

第1回で東京五輪・パラリンピック組織委員会が公表した「ボランティア戦略」の中の、「果たす役割」の項目の明記されていることをご紹介しました。それでは、実際にボランティアとして「おもてなしの心」をどうやって伝えればいいのでしょうか。

まず大切なことは好感度を高めて、第一印象をよくすることです。そのための5原則のことです。それぞれ、1つ目は「笑顔」です。まずは、100―10になってしまうと、それを覆すには2・3倍の時間がかかるといわれますから、いかに第一印象が大切かがわかります。

表情で重要なのは、目と口角を意識した笑顔、そして、目と目を合わせる「アイコンタクト」です。笑顔は「目もからならないおしゃれ」と言われ、「目は口ほどにものを言う」ともいわれます。2つ目は「言葉づかい」です。まずは、「相手ありき」です。すてきなスーツを着ていなくても、目が輝き、口角の上がった幸せな笑顔しかなければ、相手は、両手で差し出していつまでも受け取ってくれます。

ためになる情報を提供する意識が大切です。3つ目は「身だしなみ」です。相手の目を見て、言葉をかけ、「相手だけでしょ」と笑顔で言葉をかけます。目切りが早く、振り返った瞬間に真顔になってはいけません。笑顔の持続は相手に「心を留める」ことを表現します。よい態度は相手に明るく印象を与える第一印象の基本です。

4つ目は「言葉づかい」です。「いさつ」は「挨拶」の略語です。さらに「言葉づかい」は、「いさつ」と「言葉づかい」の略語です。